

# もみの木

GRANTRAEET

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫



まちそとの森もりに、いっぽん、とてもかわいらしい、もみの木がありました。そのもみの木は、いいところにはえていて、日あたりはよく、風とおしも十じゅうぶん分で、ちかくには、おなかまの大きなもみの木や、はりもみの木が、ぐるりを、とりまいていました。でもこの小さなもみの木は、ただもう大きくなりたいたと、そればつかりねがっていました。ですから森のなかであたたかいお日さまの光のあたっていることや、すずしい風の吹くことなどは、なんともおもっていませんでした。また黒いちごや、オランダいちごをつみにきて、そこいらじゅうおもしろそうにかけまわって、べちやくちやおしゃべりしている百姓のこどもたちも、気にかか

らないようでした。こどもたちは、つぼいっぱい、いちごにしてしまおうと、そのあとのいちごは、わらでつないで、ほつとして、小さいもみの木のそばに、腰こしをおろしました。そして

「やあ、ずいぶんかわいいもみの木だなあ。」

と、いいいいしました。けれど、そんなことをいわれるのが、このもみの木は、いやで、いやで、なりませんでした。

つぎの年、もみの木は新芽しんめひとつだけはつきりのび、そのつぎの年には、つづいてまた芽ひとつだけ大きくなりました。そんなふうで、もみの木の歳としは、まいねんふえてゆく節ふしのかずを、かぞえて見ればわかりました。

小さいもみの木は、ためいきをついて、こういいました。



「わたしも、ほかの木のようにな大きかったら、さぞいいだろうなあ。そうすれば、枝を<sup>えだ</sup>うんとおぼして、たかい梢<sup>こずえ</sup>の上から、ひろい世のなかを、見わたすんだけど。そうなれば、鳥はわたしの枝に巣<sup>す</sup>をかけるだろうし、風がふけば、ほかの木のようにな、わたしも、おうように、こつくりこつくりしてみせてやるのだがなあ。」

こんなふうでしたから、もみの木は、お日さまの光を見ても、とぶ鳥を見ても、それから、あさゆう、頭<sup>あたま</sup>の上をすうすうながれていく、ばらいろの雲を見ても、ちつともうれしくありませんでした。

やがて冬になりました。ほうぼう雪が白くつもって、きらきらかがやきました。するとどこからか一ぴきの野うさぎが、まい日

のように来て、もみの木のあたまをとびこえとびこえしてあそびました。——ああ、じつにいやだったらありません。——でも、それからのち、ふた冬とおりこすと、もみの木はかなり、せいが高くなりましたから、うさぎはもうただ、そのまわりを、ぴよんぴよん、はねまわっているだけでした。

「ああうれしい。だんだんそだつていつて、今に大きな年をとつた木になるんだ。世のなかにこんななすばらしいことはない。」  
もみの木は、こんなことを考<sup>かん</sup>が<sup>が</sup>ていました。

秋になると、いつも木こりがやって来て、いちばん大きい木を二、三本きりだします。これは、まい年のおきまりでした。そのときは、見あげるほど高い木が、どしんという大きな音をたてて、

地面じめんの上にたおされました。そして枝をきりおとされ、太ふといみきのかわをはがれ、まるはだかの、ほそっこいものにされて、とうとう、木だかなんだかわけのわからないものになると、この若いもみの木は、それをみてこわがってふるえました。けれども、それが荷車にぐるまにつままれて、馬にひかれて、森を出ていくとき、もみの木はこうひとりごとをいって、ふしぎがっていました。

みんな、どこへいくんだらう。いったいどうなるんだらう。

春になって、つばめと、こうのとりがとんで来たとき、もみの木はさつそくそのわけをたずねました。

「ねえ、ほんとにどこへつれて行かれたんでしょうね。あなたがた。とちゅうでおあいになりませんでしたか。」



つばめはなんにもしりませんでした。けれどもこうのとりは、しきりとかんがえていました。そしてながいくびを、がってん、がってんさせながら、こういいました。

「そうさね、わたしはしつっているとおもうよ。それはね、エジプトからとんでくるとちゆう、あたらしい船ふねにたくさん、わたしは出あつたのだが、どの船にもみんな、りっぱなほばしらが立っていた。わたしはきつと、このほばしらが、おまえさんのいうもみの木だとおもうのだよ。だって、それにはもみの木のおいがしていたもの。そこで、なんべんでも、わたしはおことづけをいいます。大きくなるんだ、大きくなるんだってね。」

「まあ、わたしも、遠い海をこえていけるくらいな、大きい木だ

つたら、さぞいいだろうなあ。けれどこうのとりさん、いつたい海つてどんなもの。それはどんなふうに見えるでしょう。」

「そうさな、ちよつとひとくちには、とてもいえないよ。」

こうのとりはこういったまま、どこかへとんでいつてしまいましたが。そのとき、空の上でお日さまの光が、しんせつにこういつてくれました。

「わかいあいだが、なによりもいいのだよ。ずんずんのびて、そだつていくわかいときほど、たのしいことはないのだよ。」

すると、風も、もみの木にやさしくせつぷんしてくれました。

つゆもはらはらと、しおらしいなみだを、かけてくれました。けれどももみの木には、それかどういいうわけかわかりませんでした。

クリスマスがちかくなつてくると、わかい木がなんぼんもきりたおされました。なかには、このもみの木よりもわかい小さいのがありますし、またおない年ぐらいのもありました。ですからもみの木は、じぶんも早くよその世界<sup>せかい</sup>へでたがつて、まいにち、気が気でありませんでした。そういうわかい木たちは、なかでもことに枝ぶりの美しい木でしたから、それなりきられて、車につまれて、馬にひかれて、森をでていきました。

「どこへいくんだらう。あの木たちは、みんな、わたしより小さいし、なかにはずっと小さいのもある。それからまた、なんだつて、枝をきりおとされないんだらう。いつたい、どこへつれていかれるんだらう。」

もみの木は、こういつてきくと、そばですずめたちが、さえずつていました。

「しつているよ、しつているよ、町へいったとき、ぼくたちは、まどからのぞいたから、しつているよ。みんなは、そりやあすばらしいほど、りっぱになるんだよ。まどからのぞくとね、あたたかいおへやのまんなかに、小さなもみの木は、みんな立っていたよ。金きんいろのりんごだの、蜜みつのお菓子かしだの、おもちゃだの、それから、なん百とも知れないろうそくだので、それはそれは、きれいにかざられていたつけ。」

「で、それから——。」と、もみの木は、のこらずの枝をふるわせながらたずねました。「ねえ、それから、どうしたの。」

「うん、それからどうしたか、ぼくたちはしらないよ。とにかく、あんなきれいなものは、ほかでは見たことがないね。」

「ああ、どうかして、そんなはなばなしい運うんがめぐってこないかなあ。」と、もみの木は、とんきような声をあげました「それこそ白い帆ほをかけて、とおい海をこえていくよりも、ずっとよさそうだ。ああ、いききたいな。いききたいな。はやく、クリスマスがくればいいなあ。わたしはもう、去年、つれていかれた木とおなじくらい、せいが高くなつたし、すっかり大きくそだってしまった。——ああ、どうかして、はやく荷にぐるま車の上に、つまれるようになればいいなあ、そして、目のさめるように、りっぱになつて、あたたかいへやに、すみたいものだなあ。だが、それから、それ

からはどうなるだろう。——たぶん、それから、もつといいこととおこるだろう。もつとおもしろいことに、ぶつかるだろう。もしそうでなければ、そんなにきれいに、わたしたちをかぎつておくはずがないもの。きつとなにか、たいしたことがおこるんだろう。すばらしいことが、やってくるんだろう。だがそれはなんだろうなあ。——なんだかわからないが、ただいきたい。ああ、たまらないぞ。もう、じぶんでじぶんがわからないんだ。」

そのときまた、風とお日さまの光とが、やさしく声をかけました。

「わたしたちのなかにいるほうがきらくだよ。このひろびろしたなかで、げんきのいい、わかいときを、十分にたのしむのがいい

のだよ。」

けれども、もみの木は、そんなことをきいても、ちつともうれしくありませんでした。

こうして冬が去って、夏もすぎました。もみの木はずんずんそだつて行って、いつもいつもいきいきした、みどりの葉をかぶつていました。ですからたれも、このもみの木をみた人で、

「なんてまあきれいな木だろうね。」

と、いわないものはありませんでした。

それで、クリスマスきせつの季節になると、このもみの木は、とうとう、まつさきにきられました。そのとき、おのが、木のしんまできりこんだので、もみの木は、うめきごえを立てて、地の上になた

おれました。からだじゆう、ずきずきいたんで、だんだん、気が遠くなりました。かんがえてみると、うれしいどころではありません。じぶんがはじめて芽めを出した森の家いえからはなれるのは、しみじみかなしいことでした。こどものときからおなじみの、ちいさな木や花などにも、それからたぶん小鳥たちにも、もうあえな  
いだろうとおもいました。まったく旅たびに出るとするのは、つらいものにちがいありませんでした。

やっと、しようきづいて見ると、もみの木は、ほかの木といっしょにわらくるまれて、どこかのうちのにわのなかにおかれていました。そばではひとりの男がこういつていました。

「この木はすてきだなあ。これいっぽんあればたくさんだ。」



そこへはつぴをきた、ふたりの男がやってきました。そして  
みの木を、りっぱにかぎった、大きなへやにはこんでいきました。  
へやのかべにはいろいろながくが、かかっています。タイルば  
りの大きなだんろのそばには、ししのふたのついた、青磁せいじのかめ  
が、おいてありました。そこには、ゆりいすだの、きぬばりのソ  
ファだの、それから、すくなくとも、こどもたちのいいぶんどお  
りだとすると、百円の百倍もするえほんや、おもちゃののつてい  
る、大きなテーブルなどがありました。もみの木は、砂すながいつぱ  
いはいつている、大きなおけのなかにいれられました。けれど、  
たれの目にも、それはおけとは見えませんでした。それは青あおし  
た、きれでつつまれて、うつくしい色もようのしきものの上にお

いてありました。まあ、このさき、どんなことになるのかしら、もみの木はぶるぶるふるえていました。召使たちについて、お嬢じょうさんたちも出てきて、もみの木のおかざりを、はじめました。枝にはいろがみをきりこまざいてつくったあみをかけました。そのあみの袋には、どれもボンボンや、キャラメルがいっぱいはいっていました。金紙をかぶせたりんごや、くるみの実が、ほんとうになっっているように、ぶらさがりました。それから、青だの、赤だの、白だの、ろうそくを百本あまり、どの枝にも、どの杖にもしつかりとさしました。まるで人間かと思われるほど、くりくりした目のにんぎようが、葉と葉のあいだにぶらさがっていました。まあにんぎようなんて、もみの木は、これまでに見たことが

ありませんでした。——木のてっぺんには、ぴかぴか光る金紙きんがみの星をつけました。こんないろいろなものでかざりたてましたから、もみの木は、それこそ、見ちがえるように、りっぱになりました。

「さあ、こんばんよ。」と、その人たちは、みんないっていました。「これでこんばん、あかりがきます。」

それをきいて、もみの木はかんがえました。

「いいなあ、こんばんからだってねえ。はやくばんになって、あかりがつけばいいなあ。それからどんなことがあるだろう。森からいろいろな木があいにくるかしら。それとも、すずめたちがまどガラスのところへ、とんでくるかしら。もしかしたら、このま

まここで根がはえて、冬も夏もこうやってかざられたまま、立っているのかもしれない。」

そんなふうには、あれやこれやとかんがえるのも、もつともなことでした。けれども、もみの木はあんまりかんがえつめたので、からだのかわが、いたくなりました。ちょうど、にんげんが、ずつうでくるしむように、木にとっては、このかわのいたいのは、かなりこまるびようきなのでした。

さて、ろうそくのおかげがつかまりました。なんとかがやかしさなのでしよう。なんとというりっぱさなのでしよう。もみの木は、うれしまぎれに、枝という枝をぶるぶるさせました。そのため、いっぼんのろうそくの火がゆれて、あおい葉にもえうつりました。

おかげで、かなりこげました。

「あぶないわ。」と、お嬢じょうさんたちはさげんで、あわてて火をけしました。そこでもみの木は、もうからだをふるわすこともできませんでした。こうなると、それはまったくおそろしいほどでした。もみの木はせつかくのかぎりを、ひとつもなくすまいと、しんぱいしました。それに、あんまり明あかるすぎるので、ただもうぼうつとなりました。――

やがて、両びらきのとびらがさあつとあいて、こどもたちが、まるで、クリスマススの木ごとたたきおとしそうないきおいで、とびこんできました。おとなたちも、そのあとからしずかについてきました。こどもたちは、ほんのちよつとのあいだ、だまって立

っていましたが、——たちまち、わあっというさわぎになって、木のまわりをおどりまわりながら、クリスマスのおくりものを、ひとつ、ひとつ、さらっていききました。

「この子たちはなにをするんだろう。なにがはじまるんだろう。」と、もみの木はかんがえました。するうち、枝のところまで、ろうそくは、だんだんともえていきました。そしてひとつずつ消されてしまいました。やがて、木の枝につけてあるものを取ってもいいというおゆるしが出ました。やれやれたいへん、こどもたちは、いきなり木をめがけて、とびつきました。木はみしみしと音を立てました。もみの木のでっぺんにつけてある金紙きんの星ほしが、うまくてんじょうにしばりつけてなかったら、きっと木は、あおむ

けにひつくりかえされたことでしよう。

こどもたちは、もぎ取<sup>と</sup>つたりつぱなおもちやを、てんでんにもつて、おどりまわりました。ですからたれひとり、もう木をふりかえって見るものはありませんでした。たつたひとり、ばあやが、木につけてあつた、いちじくやりんごを、こどもたちがとりのこしていやしないかとおもつて、枝のなかに首<sup>くび</sup>をさしいれて、のぞきこんただけでした。

「おはなししてね、おはなししてね。」

こどもたちはそうさけんで、ずんぐりしたひとりの小さい人を、木のところへひつぱっていきました。その人は、木の下に腰<sup>こし</sup>をおろしてこういいました。

「よしよし、こうしていれば、みなさんはみどりの森のなかにいるようなものだ。だから、この木もうれしがって、おはなしをきくだろう。だがおはなしはひとつだけだよ。\*イウエデ・アウエデのおはなしをしようかね。それとも、だんだんからころげおちたくせに、うまく出<sup>しゅっせ</sup>世して、王<sup>おうじよ</sup>女さまをおよめさんにした、でつくりもつくりさんのおはなしをしようかね。」

\*イウエデ、アウエデ、キウエデ、カウエデ—というようにつづくことばあそび。

「イウエデ・アウエデ。」と、五六人のこどもたちはさげびました。するとほかのこどもたちは、「でつくりもつくりさん。」とさげびました。みんながそうやって、くちぐちに、わいわい



たてるので、がやがや、がやがや、おおさわぎになりました、けれども、もみの木ばかりは、だまってこうおもっていました。

「わたしには、そうだんしてくれないのかしら。わたしは、このおなかまではないのかしら。」

なるほどおなかまにはちがいないのです。けれどももみの木のおやくめは、もうすんでいました。

やがていまの人は、だんだんをころげおちたくせに、出世して、王女さまをおよめさんにした、でつくりもつくりさんのおはなしをしました。おはなしがすむと、こどもたちは、ぱちぱち手をたたいて、

「もひとつして、もひとつして。」と、さけびたてました。こど

もたちはイウエデ・アウエデのおはなしもしてもらいたかったの  
でしたが、でつくりもつくりさんのおはなしだけで、がまんしな  
ければなりませんでした。もみの木はびつくりしたような、それ  
でいて、かんがえこんでいるようなようすをしていました。だつ  
て、森の鳥たちは、そんなはなしは、ちつともしてくれませんか  
したからね。

「でつくりもつくりさんは、だんだんから、ころげおちたくせに、  
王女さまを、およめさんにしたとき。そうだ、そうだ。それが世よ  
のなかというものなんだ。」と、もみの木はかんがえました。そ  
してあんなりっぱな人が、そうはなしたんだから、それはほんと  
うのことにちがいないと思いました。

「そうだ、そうだ、わたしだって、だんだんからころげおちて、王女さまをおよめさんにもらうかもしれない。」

これで、あしたもまた、あかりをつけてもらって、おもちゃだの、金のくだものなので、かざられるのだと思って、もみの木はぞくぞくしていました。

「あしたはもうふるえないぞ。こんなになりっぱになっただから、うんとうれしそうな、とくいらしいかおをしていよう。きつとまた、でつくりもつくりさんのおはなしをしてもらえるだろうし、ことによったら、イウエデ・アウエデのおはなしもしてもらえるかもしれない。」

こうしてもみの木は、じつとひと晩ばんじゆうかんがえあかしまし

た。

つぎの朝、<sup>あさ</sup>召使たちがやってきました。

「ああ、きつともういちど、りっぱにかぎりなおしてくれるんだな。」と、もみの木は思いました。けれども、召使たちは、木へやのそとへ、ひきずっていきました。そして、はしごだんをあがって行って、<sup>やね</sup>屋根うらのものおきのうすぐらいすみへ、ほうりあげました。そこにはまるで、お日さまの光がさして来ませんでした。

「どうしたっていうんだらう。こんなところで、なにができるんだらう。こんなところで、はなしをしても、なにがきこえるだろ

う。」と、もみの木はかんがえました。そしてかべにもたれたまま、いつまでも、あきずに、かんがえつづけていました。——もうずいぶん時間がありました。なにしろ、いく日にちとなく、いく晩となく、すぎて行きましたからね。けれども、たれひとりやつては来ませんでした。それでも、とうとうたれかが上がつてきました。が、なにかふたつ三つ大きな箱はこを、すみのほうへほうりだして行つたばかりでした。おかげで、もみの木は、その箱の下じきになつて、かくれてしまいました。まあその木のいることなど、まるで、忘れられてしまったのでしよう。

「今は、そとは冬なのだ。地めんはかちかちにこおつて、雪がかぶさっている。だから、あの人たちは、わたしをうえることがで

きない。それで、わたしは春がくるまで、ここでかこわれているのだ。ほんとに、なんてかんがえぶかい人たちだろう。——ただ、ここがこんなに、うす暗い<sup>くら</sup>さびしいところでなければいいとおもうな。——なにしろ、野うさぎ一ぴき、はねてこないのだもの。

——雪がつもって、うさぎがそばをはねまわったりするじぶん、あの町そとの森のなかは、ずいぶん、よかつたなあ。そうそう、兎<sup>うさぎ</sup>がよく、あたまのうえをとびこえたつけ。あのときは、すいぶん、はらがたつたがなあ。それも今ではなつかしい。それにくらべては、ここの屋根うらのおそろしいほどな、さびしさといったら。」

「チュウ、チュウ。」

そのとき、ふと、小ねずみがなきながら、ちよろちよろとはいだしてきました。そのあとから、もう一ぴきの、小ねずみが出てきました。ねずみたちは、もみの木のおいをかいて見て、枝のあいだを、はいまわりました。

「ひどいさむさですnee。」と、小ねずみたちはいいました。

「でもここはずいぶんいいところでしょう。そうはおもいませんか、もみの木のおじいさん。」

「わたしは、そんなおじいさんじゃないぞ。」と、もみの木は少しおこつていいました。「まだまだ、ぼくより、としをとつている木は、たくさんあるよ。」

「あなたはどこからきたの。いろんなことを知っているの。」と、

小ねずみたちは、たいへんなにかをききたがっていました。「ねえ、もみの木さん。世のなかで、いちばんすばらしいところのことを、おはなししてください。あなたは、そこからきたんでしよう。そら、たなの上にチーズがのつていたり、てんじょうから、ハムがぶらさがっていたり、あぶらろうそくの上で、おどりをおどったりして、はいるとき、ひよろひよろ、出るとき、むつくりでつくり——、と、いうようなところにいたんでしよう。」

「どうも、そんな所は知らないね。」と、もみの木はいいました。「けれど、森のことならしっているよ。そこではお日さまの光はよくあたるし、鳥がうたをうたっているよ。」

それからもみの木は、じぶんのわかかったときのことを、すつ



かりはなしました。小ねずみは、これまでに、そんなことをちつともききませんでしたので、めずらしがってきいていました。それからあとでこういいました。

「まあずいぶんいろいろなものを、たくさん見たんですねえ。ずいぶんしあわせだったんですねえ。」

「わたしがかい。」

そういわれて、もみの木は、はじめて、いま、じぶんのはなしたことをかんがえてみました。

「なるほど、そういえばしあわせだったよ。そう、つまりあのじぶんが、わたしもいちばんしあわせだったなあ。」

それから、もみの木は、おいしいおかしや、ろうそくのあかり

でかざられた、クリスマス前の晩のはなしをしました。

「まあ、ずいぶんしあわせだったのね、もみの木のおじいさんと、小ねずみがいいました。」

「わたしは、そんなにおじいさんではないというのに。」と、もみの木はいいました。「この冬、はじめて森のなかから出てきたばかりだもの。わたしは、今がさかりの年なんだ。ただすこしのつぽにそだちすぎたかもしれない。」

「おじいさんののはなしはおもしろいね。」  
と、小ねずみがいいました。

つぎの晩にも、小ねずみは、ほかに四ひきのなかまをつれて、話をききにやってきました。もみの木は、話していればいるほど、

あれもこれもはつきりおもいだせました。そして、こうかんがえ  
ました。

「あのじぶんは、ほんとにしあわせだったけれど、ああいうじだ  
いがまたやってくるだろう。きつとまたやってくるだろう。でっ  
くりもつくりさんは、だんだんからころげおちたくせに、王女さ  
まをおよめさんにもらった。だからわたしだって、たぶん王女さ  
まをおよめさんにするかもしれない。」

それから、もみの木は、森のなかにはえていた、かわいらしい  
白しろかばの木のことをおもいだしました。その白かばの木は、ほん  
とにきれいでしたから、もみの木には、それがうつくしい王女さ  
まのようにおもわれました。

「でつくりもつくりさんて、だれなんですか。」

と、小ねずみたちがたずねました。もみの木は、ひとつもまちがえずに、そのおはなしを、すっかりはなしてやりました。小ねずみたちは、それはそれはうれしがって、もみの木のいちばん高い枝にとびつきそうにしていました。つぎの晩には、もつと、たくさんのおねずみたちがきました。にちよう日には二ひきのおやねずみさえ出てきました。けれど、このおやねずみは、そんなはなしは、いっこうおもしろくないといいました。そういわれると、小ねずみたちも、すこし、がっかりしていました。なるほど、それはせんほどおもしろくおもわれませんでしたものね。

「君のしっているお話は、それひとつきりなのかい。」と、おや

ねずみはいいました。

「ああ、これひとつき。」と、もみの木はこたえました。「なにしろわたしはうまれていちばんしあわせだった晩に、そのおはなしをきいたのだからね。けれど、そのときは、それがそんなにしあわせだとはしらなかつた。」

「ずいぶん、つまらないおはなしだなあ。君は豚ぶたのあぶらみとか、あぶらろうそくというようなものはなんにもしらないのかね。たべものやのはなしは、しらないのかね。」

「しらないねえ。」と、もみの木はこたえました。

「そう。じゃあどうもありがとう。」と、おやねずみたちはいつて、なかまのところへかえっていきました。とうとう、小ねずみ

たちもいつてしまいました。すると、もみの木は、またひとりぼっちになったので、ためいきをつきながらいいました。

「げんきのいい、小ねずみたちが、わたしをとりまいて、おもしろそうに、はなしをきいてくれたのは、ほんとにゆかいだったなあ。だが、それもおわりさ。でも今にここからはこびだされれば、せいぜいものをたのしくかんがえることだ。」

ところで、いつそんなことになったでしょうか。

なるほど、あくる朝、おおせい大勢してがたがた、ものおきをかたづけにきました。そして箱をどけて、もみの木をはこびだしました。それから、かなりらんぼうに床ゆかのうえになげだしました。やがて

ひとりの下男が、それをそのままはしごだんのほうへひきずっていききました。こうしてもみの木は、もういちど、日の目を見ることができませんでした。

「さあ、また生きかえったぞ。」と、もみの木はおもいました。もみの木は、すずしい風に吹かれて、朝のお日さまの光にあたりました。——そこはほんとうに家のそといえの、にわのなかでした。いろいろなことが、目まぐるしいほど、はたで、どんどんおこつてくるので、もみの木はすっかり、じぶんのことをわすれてしまいました。ぐるりにはたくさん、目につくものがありました。このにわは、すぐ花ぞのにつづいていて、そこには、いろいろの花が、いっぱい咲いていました。ほんのりいいにおいのするばらが、

ひくいかきねにからんでいましたし、ぼだいじゆも、ちようど花ざかりでした。つばめたちは、その上をとびまわりながら、さえずっていました。

「びいちくち、びいちくち、うちのひとがかえってきましたよ。」  
けれどもそれは、もみの木のことはありませんでした。

「さあ、いよいよこれから、わたしは生きるのだぞ。」

と、うれしそうな声をだして、もみの木はおもいきり、えだ枝をいっぱい**の**ぼしました。けれど、やれやれかわいそうに、その枝のさきは、がさがさに乾ひからびて、黄きいろくなくなっていました。そして、じぶんはにわのすみっこで、ざっそう雑草や、いばらのなかに、ころがされていました。金紙きんがみの星はまだあたまのてっぺんについてい



ました。そしてその星は、あかるいお日さまの光で、きらきらかがやいていました。

ところで、そのとき、にわには、あのクリスマスの晩、この木のまわりをとびまわった、けんきのいいこどもたちが、あそんでいました。するとひとり、いちばんちいさい子がかけてきて、いきなり金の星を、もぎとつてしまいました。

「ごらんよ。きたない、ふるいもみの木にくつついていたんだよ。」

その子はそうさげびながら、枝をふんづけましたから、枝はくつの下で、ぽきぽき音を立てました。

もみの木は、目のさめるようにうつくしい、花ぞののなかの花

をみました。そしてみすぼらしいじぶんのすがたを見まわしてみ  
て、これならいっそ、ものおきのくらいかたすみにはうり出され  
ていたほうが、よかったとおもいました。それからつづいて森の  
なかにいたときの、わかいじぶんのすがたを、目にうかべました。  
楽しかったクリスマス前の晩のことを、おもいだしました。で  
つくりもつくりさんのおはなしを、うれしそうにきいていた、小  
ねずみたちのことをおもいだしました。

「もうだめだ、もうだめだ。」と、かわいそうなもみの木はため  
いきをつきました。「たのしめるときに、たのしんでおけばよか  
った。もうだめだ。もうだめだ。」

やがて、下男げなんが来て、もみの木を小さくおって、ひとたばの薪まき

につかねてしまいました。それから大きなゆわかしがまの下へつっこまれて、かつかと赤くもえました。もみの木はそのとき、ふかいためいきをつきました。そのためいきは、パチパチ弾丸だんがんのはじける音のようでした。ですから、そこらであそんでいることもたちは、みんなかけてきて、火のなかをのぞきこみながら、

「パチ、パチ、パチ。」と、まねをしました。

もみの木は、あいかわらず、ふかいためいきのかわりに、パチパチいいながら、森のなかの、夏のまひるのことや、星がかがやいている、冬の夜半よなかのことをおもっていました。またクリスマス  
の前の晩のことや、たったひとつきいて、しかも、そのとおりに  
おはなしのできるでつくりもつくりさんの、むかしばなしのこと

を、かんがえていました——するうち、木はもえきつてしまいました。  
した。

こどもたちは、やはり、にわであそんでいました。そのいちばん小さい子は、金の星をむねの上につけていました。その星は、もみの木が一生のうちで、いちばんたのしかった晩、あたまにつけていたものでした。けれど、いまはそれも、おしまいになりました。もみの木も、そのおはなしも、おしまいになりました。おしまい。おしまい。さて、どんなおはなしも、そうしておしまいになっていくのです。





# 青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第二巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月15日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、\*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# もみの木

## GRANTRAEET

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>